

沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展
OKINAWA PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL CENTER

発掘調査速報 2018

2018年7月31日(火)▶9月2日(日)



◆巡回速報展

伊江村農村環境改善センター 2019年1月8日(火)▶1月15日(火)

■主催 沖縄県立埋蔵文化財センター

■共催 伊江村教育委員会・うるま市教育委員会・宮古島市教育委員会

目 次

ごあいさつ	1
平成 29 年度 発掘調査実施箇所一覧	2
神山古集落（宜野湾市）	4
東普天間住宅地区（宜野湾市）	8
中城御殿跡（首里高校内）（那覇市）	12
県営首里城公園 中城御殿跡（那覇市）	16
首里当蔵旧水路（那覇市）	20
ナガラ原第三貝塚（伊江村）	26
浜崎貝塚（伊江村）	30
浦底遺跡（宮古島市）	32
アラフ遺跡（宮古島市）	35
平敷屋トウバル遺跡（うるま市）	38
勝連城跡（うるま市）	40
沖縄歴史年表	44
発掘調査のきっかけ（契機）とは	45

表紙写真



1. 中城御殿 首里高校内

2. 県営首里城公園 中城御殿跡
3. 神山古集落
4. 首里当蔵旧水路
5. キャンプ瑞慶覧東普天間住宅地区
6. アラフ遺跡
7. ナガラ原第三貝塚
8. 勝連城跡

凡 例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展「発掘調査速報 2018」を補完するものとして編集した。
2. 許可なく本書の複製及び転載、複写を禁ずる。

ごあいさつ

沖縄県内には、貝塚、グスク、集落跡、近世墓などを含め約4,500カ所の遺跡が確認されています。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、先人たちが残したこれらの埋蔵文化財の発掘調査を行い、考古学的見地から検証した成果を沖縄県の歴史・文化の解明や研究に役立てています。

通常、発掘調査が始まってから、土器や石器などの出土遺物を整理し、報告書を刊行するまでには数年の歳月を必要とします。そこで当センターでは発掘調査で得られた最新の成果をいち早く、県民をはじめとする多くの方々に見ていただきたいとの思いから、前年度に実施した発掘調査の成果を展示公開する「発掘調査速報」展を毎年開催しています。

昨年度からは、県民が埋蔵文化財に親しみ、その保護の重要性に関する理解を深めることを目的として市町村を巡回しています。

今年は当センターが実施した「神山古集落遺跡」、「県営首里城公園中城御殿跡」、「首里当蔵旧水路」、「中城御殿跡（首里高校内）」、「東普天間住宅地区」ほか、伊江村教育委員会による「ナガラ原第三貝塚」、「浜崎貝塚」、うるま市教育委員会の「勝連城跡」、「平敷屋トウバル遺跡」と宮古島市教育委員会の「アラフ遺跡」、「浦底遺跡」を加え沖縄本島・離島を含む11地区の発掘調査の成果を、出土遺物や写真パネルなどを通して紹介します。

本展を通して、多くの方々が遺跡や遺物などに接し、先人たちの暮らしに想いを馳せるとともに、沖縄の歴史と文化に対して親しみを持ち、その価値や重要性について理解を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、このたびの展示会に格別の協力を賜りました、伊江村教育委員会、うるま市教育委員会、宮古島市教育委員会をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成30年7月31日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 登川安政

沖縄本島



ナガラ原第三貝塚〔伊江村〕



浜崎貝塚〔伊江村〕



旧キャンプ場遺跡
東普天間住宅地区〔安野湾市〕



平敷屋トウバル遺跡
〔うるま市〕



神山古集落〔安野湾市〕



実施箇所一覧

宮古諸島



浦底遺跡（宮古島市）



勝連城跡（うるま市）



アラフ遺跡（宮古島市）

1



中城御殿跡（首里高校内）（那覇市）

2



県営首里城公園中城御殿跡（那覇市）

3



首里当蔵旧水路（那覇市）

神山古集落

グスク時代～第二次世界大戦

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに 神山古集落は宜野湾市宜野湾や愛知、新城、大山に隣接する集落で、第二次世界大戦後にはほとんどの土地が普天間飛行場に土地を接収されてしまいました。今回、発掘調査を行った場所は普天間飛行場内にあり、雨水排水処理施設を建設するにあたり発掘調査が行われました。発掘調査はA～C地区の3地区に分けて行われ、ピットや土坑^{ヒン}、石組み、石敷き、井戸、道跡など集落や戦争に関連する遺構が確認されました。

調査成果 中心となる遺構は近世～近代の集落に関連するものと戦争に関連する遺構です。集落関連のものでは土坑や石組み、レンガ組遺構、井戸、石敷きなどです。中でも井戸は4基確認され、共同の井戸の他にも屋敷それぞれに井戸をもっていたと考えられます。B地区の石敷きの周辺には井戸や石組み、埋め甕が一連で確認されています。戦争関連のものはA地区で交通壕と呼ばれる兵士が使う道や、タコツボという兵士が隠れ奇襲をかけるための土坑などが確認されました。また、壕も確認され、その内部には沖縄産の甕や瓶、碗などが残っていました。グスク時代の遺構では、建物の規模がわかる状況で柱穴が確認されました。その他には地形の窪みに堆積した耕作土から植栽痕も確認されました。

井戸の移築 B地区では残りの良い井戸(SE01)が確認され、神山郷友会の要望もあり神山コミュニティに移築しました。移築作業は、現地でそれぞれの石に番号を振り、移築先で組み立て、残っていなかった釣瓶や石骨などは発掘調査の成果や現存している井戸を参考に復元しました。今回の発掘調査地区は工事によって失われてしましましたが、先祖が使用していた井戸を移築することができました。

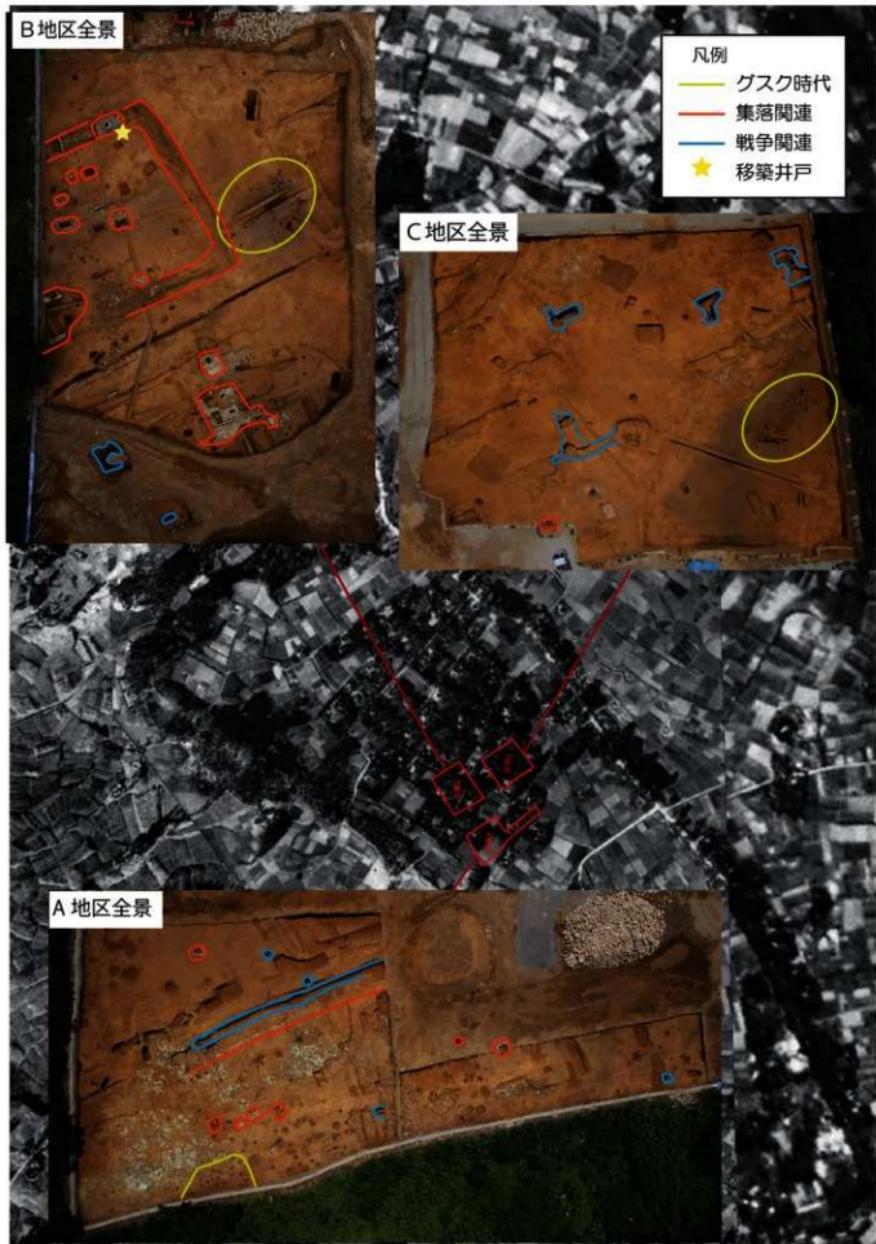
Data

事業名 神山古集落遺跡発掘調査

所在地 普天間飛行場内

調査期間 平成29(2017)年3月17日～8月17日

調査面積 6,800m²



航空写真重ね図（戦前）



B地区 石敷き（北西から）



A地区 遺構検出状況



C地区 SK040 遺物出土状況



SK01 井戸（移築後）

調査内容 本事業は、宜野湾市にある米軍基地内（キャンプ瑞慶覧）において、住宅建設に伴つて現状のまま残すことができない埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査です。調査規模が大きく、またキャンプ桑江の返還にかかる重要な事案であることもあり、宜野湾市教育委員会より依頼を受けて平成29年度から発掘調査を開始しました。平成29年度は、普天間石川原遺跡、普天間グスクンニー遺跡、^{いしかわばる}普天間下原古墓群が広がる範囲の調査を実施しました。その結果、縄文時代、グスク時代、近世～近代の大きく3時期に相当する堆積層と遺構・遺物が確認されました。

縄文時代 遺構は、集石遺構やピットが確認されています。出土遺物としては、縄文時代相当の遺物包含層より、^{ほうがんそう}縄文時代後期から晩期の土器、^{せきぞく}石鐵や石斧、^{せきふ}磨石等の石器が確認されています。

グスク時代 遺構は、谷地形を利用した溝状遺構、^{くぼ}鎌跡とみられるピットや炉跡、石列が確認されています。遺物は、溝状遺構内や遺物包含層より、中国産陶磁器やカムィヤキ、グスク土器が出土しています。また、溝状遺構の下から検出された土坑からは、グスク時代以前のくびれ平底土器が出土しています。

近世～近代 遺構は、ピット列（植栽痕）や溝状遺構が確認されています。出土遺物は、沖縄産や本土産の陶磁器を中心に中国産磁器、瓦、金属製品などの遺物が出土しています。

普天間下原古墓群の調査では、近世～近代の掘込墓、亀甲墓、平葺墓、破風墓が確認され、袖垣に小規模な掘込墓（仮墓）を伴うものもみられます。いずれも戦後に移転された空き墓であり、墓庭や墓室内には戦後基地造成時のガラス瓶や鉄屑などと共に、藏骨器や沖縄産陶器、本土産陶磁器などの破片が散乱している状態でした。

戦争関連遺構として、亀甲墓の墓庭入り口に構築された壕跡内からは、戦没者の遺骨が確認されました。遺留品は、眼鏡や軍靴、ボタン、筆記具のクリップなどが薬莢や手榴弾の破片とともに確認されています。

昭和20年の航空写真からは、戦前の東普天間住宅地区周辺は、普天間集落から安仁屋集落方面へ続く道路を中心に墓地・耕作地が広がっており、今回検出された溝状遺構やピット列などは耕作地に関連することが伺えます。

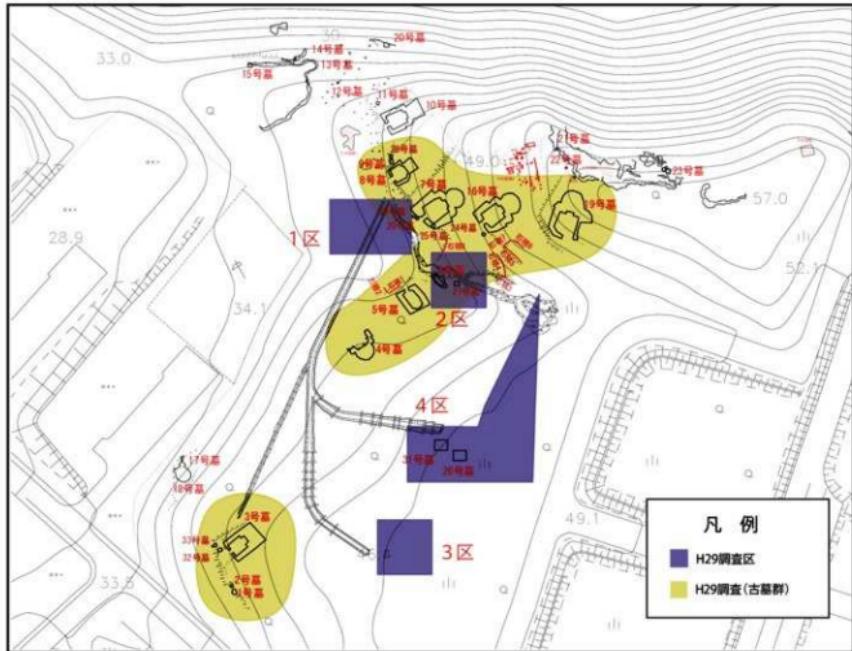


キャンプ瑞慶覧 位置



キャンプ瑞慶覧 地区名 ※西普天間住宅地区は平成27年3月31日に返還済み

Data	事業名 東晉天住宅地区発掘調査	所在地 宜野湾市晉天間（キャンプ瑞慶覧内）
調査期間	H29（2017）年8月23日～H30（2018）年3月14日	
調査面積	約6,900m ² （調査区1～4区：2,900m ² 、古墓群：4,000m ² ）	



平成 29 年度 調査範囲



遺構完掘状況（調査区 4 区）



遺構検出状況（古墓群）



集石遺構 検出状況（縄文時代）



溝状遺構 断面（グスク時代）



ピット列 検出状況（近世～近代）



亀甲墓 検出状況

中城御殿跡（首里高校内）

グスク時代～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに 中城御殿跡（首里高校内）は、現在の首里高校の敷地内で確認された遺跡です。中城御殿とは、琉球王国の国王の跡継ぎが暮らした邸宅跡のことと、1621～1640年代に創建されたと言われています。中城御殿は、1875（明治8年）に龍潭向かいの県立博物館跡地に移転し、その後の当該地は、学校施設として使用され、1911年には沖縄県立第一中学校と改称されました。沖縄戦によりそのほとんどが破壊されましたが、戦後には首里高校が建てられ、今日まで教育の場として地域に親しまれています。

いままでの調査（平成25～26年度） 中城御殿跡（首里高校内）は、首里高校の、校舎改築に伴う発掘調査として平成25・26年度に当センターがグラウンド部分の発掘調査を行いました。発掘調査の結果、石積みや井戸、石畳といった中城御殿に関連する遺構が多く見つかりました。また、当時使用されていた食器類などの遺物も多く確認されました。一部では中城御殿が創建される以前の柱穴やゴミ捨て穴なども確認されました。発掘調査で得られた様々な成果から、今まで知られていなかった中城御殿の姿が浮かび上がってきました。

当初、記録保存を目的として進めていた発掘調査ですが、他に類例のない調査成果が確認できたため、関係機関との調整を重ね、多くの遺構を現地に残すこととなりました。

平成29年度の調査成果 平成29年度は、首里高校の正門周辺と学校敷地の中央部分の発掘調査を行いました。1700年代に描かれたとされる首里古地図に重ね合わせてみると、ちょうど中城御殿の敷地の北東部分を発掘調査したことになります。

調査の結果、中城御殿を囲む外壁の一部や、屋敷内部の石積み、ゴミ捨て穴と考えられる遺構が確認できました。今回確認した遺構は、平成25・26年度に調査した遺構と同じように、遺構の記録等を行った後、遺構保護を行いながら埋め戻して現地保存しています。

Data

事業名 首里高校内埋蔵文化財発掘調査

所在地 那覇市首里真和志町2丁目 首里高等学校敷地内

調査面積 1,220m²

調査期間 平成29（2017）年8月24日～平成30（2018）年4月27日



首里古地図（1910年 具志氏模写図 沖縄県立図書館所蔵）と首里高校校舎重ね図



首里古地図（1910年 具志氏模写図 沖縄県立図書館所蔵）



屋敷内部の石積み



中城御殿の外壁石積み



中城御殿のゴミ捨て穴



屋敷内部の歩道跡



中城御殿創建以前の柱穴跡



中城御殿外壁石積みで見つかった溝（矢印部分）

中城御殿の外壁石積みに排水溝と考えられる遺構を確認しました。これまで、屋敷内部の石積みには排水用と考えられる溝が確認されていません。今回見つかった溝により、屋敷内部と外壁の石積みで、それぞれ異なる方法の排水施設があったことが想定されます。

中城御殿跡（首里高校内） 関連年表

西暦	元号	事項
1621～40年	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高校の地に建設される
1677年	尚貞9/延宝5年	玉城・豊見城両家の屋敷を織り入れて取り広げた
1798年	尚溫4/寛政10年	中城御殿内に公学校（国学）を開く
1808年	尚灑5/文化5年	王子邸にて冊封使に「料理馳走図」が出される
1868年	尚泰21/明治1年	尚典が尚灑王の世子となる
1870年	尚泰23/明治3年	久米村の守義親雲上ら3人を福州に派遣 風水を学ばせ中城御殿の風水を行なう
1872年	尚泰25/明治5年	中城御殿が薩摩北側に新しく造営されることが決まる
1875年	尚泰28/明治8年	久瀬川菜園を廃除し、中城旧殿の宅内にて改めて菜園を開き、栽培を行う
1880年	明治13年	按司奉行や親方奉行をこの役所に配置
1887年	明治20年	中城王子尚典公新築した屋敷に移る
1899年	明治32年	東京師範学校から教員を招聘し、教則の認可を受け、首里中学校と改称
1911年	明治44年	沖縄県立中学校分校が独立し沖縄県立第二中学校と称したのに伴い、沖縄県立中学校は沖縄県立第一中学校と改称
1945年	昭和20年	首里の町並みとともに沖縄第一中学校も沖縄戦により壊滅する
1946年	昭和21年	系満高等学校分校として発足
1980年	昭和55年	首里高等学校として独立
2011～12年	平成23～24年	創立100周年に際し校舎を改築し、現在に至る 那覇市教育委員会（沖縄）、県教育庁文化財課（造成土壌削、測量）
2013～14年	平成25～26年	8月 沖縄県立埋蔵文化財センターによる本調査開始
2015年	平成27年	遺構の現地保存が決定、遺構保護作業を実施
2016年	平成28年	管理・特別教室棟の建設工事開始
2017年	平成29年	8月 沖縄県立埋蔵文化財センターによる本調査実施（III・IV区）

県営首里城公園 中城御殿跡

グスク時代～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに 中城御殿跡の発掘調査は、県営首里城公園整備を目的として、平成 19（2007）年度より遺構確認調査が開始され、これまでに石造の側溝や石垣、石積み、階段、庭園の池などの遺構が良好な状態で遺されていることがわかっています。

平成 29(2017) 年度は昨年度に引き続き、敷地内北西部の上之御殿と呼ばれる地区を対象に調査を実施し、石積み遺構などが発見されました。

中城御殿の概要 中城御殿は、次期国王となる世子の邸宅として、現在の首里高等学校敷地内に創建されたが、明治 3（1870）年に、大中町に新御殿が造られ、明治 8（1875）年に移転します。

そして、明治 12（1879）年の廃藩置県により首里城は明け渡され、熊本鎮台沖縄分遣隊により占拠されました。これにより、それまで正殿や大美御殿等で暮らしていた国王をはじめとする王族は退去を余儀なくされ、一時的に中城御殿に移り住むことになります。昭和 20（1945）年の沖縄戦により破壊されるまでの間、御殿は尚家の屋敷として、王府の伝統的なしきたりが保たれた空間として当地に存在していました。

戦後は一時、引揚者たちのバラックが建てられ、のちに首里市役所、首里バス会社の敷地として使用され、昭和 40（1965）年に琉球政府立博物館の建物が新築されました。その後、博物館は本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称され、平成 21（2009）年に解体されるまで存在していました。

上之御殿地区の調査 中城御殿の公園整備を行う上で、上之御殿地区では古写真などの情報が少なく、発掘調査による成果が基礎資料として活かされることになっています。調査は平成 27（2015）年度より実施しており、これまでに御嶽のあった琉球石灰岩の大岩周囲の階段の基礎、庭園、上之御殿の外壁と考えられる南北に延びる石積みなどの成果が得られ、徐々にその姿が明らかになってきています。

Data

事業名 首里城公園発掘調査

所在地 那覇市首里大中町1丁目1番地

調査面積 約 130m²

調査期間 平成 29（2017）年 8月 2日～平成 30（2018）年 2月 28日



中城御殿屋根伏図（沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課 提供）



米軍撮影中城御殿航空写真

平成 29(2017) 年度調査の成果 平成 29 年度は、平成 27(2015) 年度に検出された石積み遺構がどの範囲に延びるのかを明らかにするために発掘調査を行いました。

調査の結果、南北に 30 m を超える長さで石積みや石畳、石列などの遺構が残されていることが判明しました。いずれの遺構も保存状態は非常に良く、これまで詳細の不明だった上之御殿地区的様相について考える上で、非常に重要な資料になることが期待されます。



石積み全景



石積み正面北側 (上写真左)



石畳・石列 (写真右)



平成 29 年度 調査区全体図

首里当蔵 旧水路

近世～近代

調査主体：沖縄県立埋蔵文化財センター

調査の経緯 本調査は、当初沖縄県土木建築部による龍潭線（県道 29 号線）街路整備事業の一環である龍潭付近の擁壁工事に伴うもので、調査後には検出された遺構は取り壊される予定でした。

しかし、調査で発見された水路遺構が良好に残っていたことから、沖縄考古学会などの研究者によりその重要性が指摘され、県民の皆さまにも保存を強く求められたことから、関係機関の中で協議を行った結果、水路遺構は現地で保存することができました。

今回の調査区は、龍潭沿いで中城御殿跡の前面に位置しておりますが、今回確認された首里当蔵旧水路は、那覇市教育委員会の調査により県道沿いに現在の首里交番付近まで、部分的に確認されております（図 1）。



図 1 首里当蔵旧水路と調査区

Data

目的 県道 29 号線（龍潭線）街路整備事業に伴う緊急発掘調査 調査面積 168m²

所在地 那覇市首里当蔵町・首里大中町

調査期間 平成 29（2017）年 12 月 14 日～平成 30（2018）年 1 月 31 日

首里当蔵旧水路周辺の歴史環境 今回の調査区に近接する龍潭は、琉球統一を果たしたとされる尚巴志が1427年に、明からの冊封使のすすめに従って、国相の懐機が作庭した人工池であり、魚小堀とも呼ばれます。明の首都であった北京をはじめ、中国各地に龍潭池があるそうです。この龍潭は1955年に琉球政府（現在、沖縄県）指定史跡となっております。

この龍潭の北端である現在の県道には、戦前までは世持橋^{よもち}が架かっており、今回確認された水路^{よもじ}はこの橋の下に流れ込んでいたと考えられます（図2）。この橋は、1661年に第一尚氏の菩提寺^{ゆみんじゆ}となる慈恩寺跡より移築したものと言われています。なお、世持橋の北側には「大溝」^{おほくび}と呼ばれた水路があり、かつてあった「山川樋川」^{やまかわひがわ}辺りまでつながり、真嘉比川、安里川そして泊港まで流れが続いてたようです。

また、本水路は那覇市教育委員会の調査では現在の首里交番まで続いているものと思われます。この一帯は先述した慈恩寺^{りんぐいじ}と蓮小堀^{れんこぼ}という池があり、本水路はこの池が基点であったとも考えられますが、もっと東側へ続く可能性もあるかもしれません（図3）。



図2 戦前の世持橋（出典：写真集 沖縄）

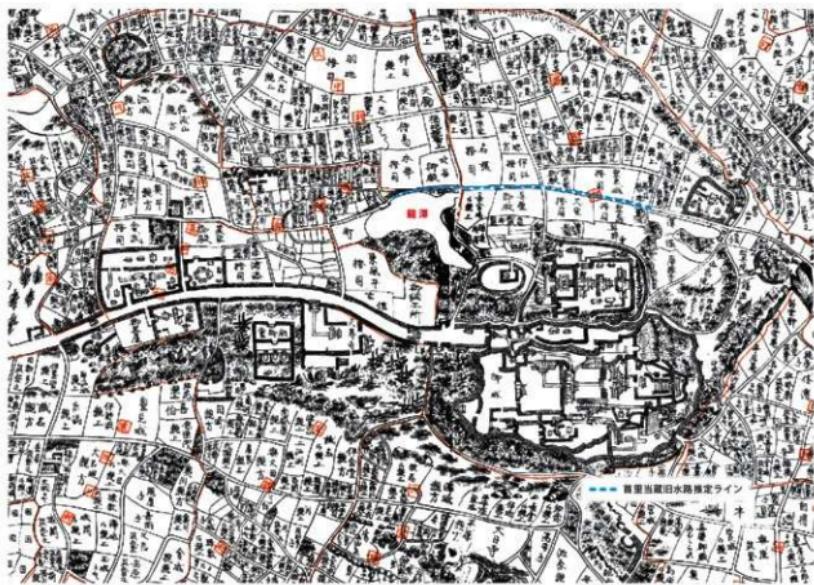


図3 首里古地図による龍潭周辺

調査の成果 今回の調査では、龍潭の北岸沿いの崖端に水路遺構が、約 60 m の長さで良好に確認できました（図 4・5）。水路は幅 70cm、深さ 60cm を測り、両側には長さ 20～60cm の琉球石灰岩で 3～4 段積まれています。床面には、20～30cm ほどの石を石畳のように敷き詰めています。龍潭側に設定したサブトレンチでは、幅 80cm ほどの両面積みの石垣であったことも分かりました（図 6・7）。また龍潭側の上段部分には、機械できれいに仕上げた細長い切石が多く使われており、戦後にも改修されていたものと考えられます（図 8）



図 4 調査区遠景



図 5 水路遺構（上空より）



図6 水路遺構（東から）



図7 龍潭側石垣



図8 機械加工と思われる切石

この水路の石積みですが、この水路を横断する形でサブトレンチを設定し、一部床石を外したところ、両壁が床面よりもさらに2段程度の石が積まれていることが確認できました。つまり、この水路は床石から置かれたのではなく、側壁を積み上げてから床面を整地していったものと考えられます（図9）。また、側壁が床石とは異なる角度で明らかにその下方から積まれている部分もあります。このように、本遺構はその地形に合わせた積み方で構築されたのでしょう（図10）。なお、床面は西方へ向かって緩やかに下っており、調査区西側では約5°と傾斜角がやや大きくなっています。スムーズに流水される仕組みでした。

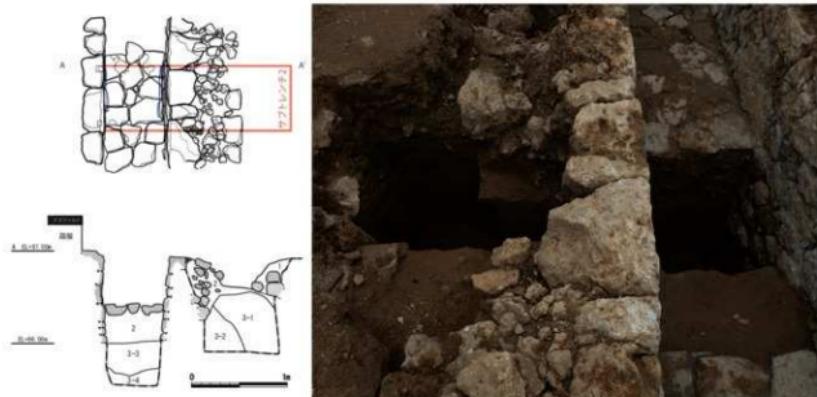


図9 サブトレンチによる水路遺構の断面

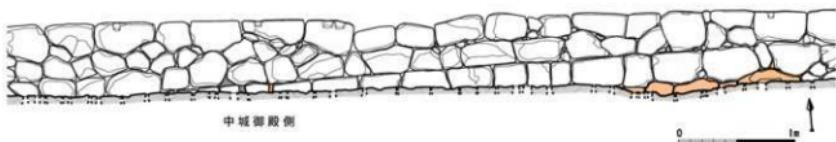


図10 床面と違えて積まれる石垣

水路遺構が作られた時期は、床面の下層を一部取り外して調査を行ったところ、寛永通寶の鉄錢（1739年以後の鋳造）が出土したので、18世紀後半以降の可能性が考えられます。また、明治ごろに撮影されたとされる写真をみると、龍潭側に人の腰ほどの石垣が見え、また水路遺構も部分的に写っています（図11・12）。この写真と水路遺構の龍潭側壁面が石垣であったことが一致しており、この遺構は少なくとも明治期以前の形態を留めていることが分かります。



図 11 中城御殿と龍潭（沖縄県立博物館・美術館蔵）



図 12 中城御殿正門より龍潭側を見る

（沖縄県立図書館蔵）

一方、この水路遺構はいつ埋まったのでしょうか。今回の調査に入る前は、ここは既にアスファルトが敷かれた歩道でした。その歩道の下層にコンクリートの暗渠が現れ、そのコンクリートを外すと水路遺構が出てきました（図 13）。このコンクリートの暗渠がいつ作られたかは明確ではありませんが、戦後以降から復帰以前のものと思われます。水路遺構を壊さずにそのまま覆って作られたことにより、今まで良好に残っていたとも言えます。

さて、この水路遺構は調査区より西側にも現存しており、コンクリートに覆われた姿で世持橋の下まで続いているのが見ることができます（図 14）。



図 13 工事中に発見された水路



図 14 世持橋へ続くコンクリート水路

今後にあたって 今回、街路整備工事に伴う発掘調査により、これまでコンクリート暗渠の下に眠っていた石積みの水路遺構を確認することができました。そして、この遺構は少なくとも明治以前に遡り、琉球王国時代の様子を偲ぶことができます。沖縄県では、今後この水路遺構の保存活用について検討を進めていくところです。

首里周辺には、今回のような文化財がまだ地中にも埋もれているものと思われます。首里という歴史ある街づくりを進めていくためには、まだ見ぬ将来の文化財の調査・保存について皆さまの理解を得られるよう、努力していくことが求められるものと思われます。

ナガラ原第三貝塚

縄文時代～弥生時代並行期

調査主体：伊江村教育委員会

はじめに ナガラ原第三貝塚は伊江島の南海岸に所在する遺跡の1つです。平成23（2011）年に試掘調査が行われ、平成25（2013）年、県営農地保全整備事業の浸透池設置工事に先立ち、埋蔵文化財緊急発掘調査を行いました。

調査成果 調査の結果、3つの時期の遺跡が確認されました。

IV層からは弥生時代並行期の遺構・遺物が確認されました。遺構は貝溜りやイモガイ集積遺構が見つかり、このうちイモガイ集積遺構は九州との交易のためにイモガイが集められた遺構と考えられています。出土遺物としては、ほぼ完形の浅鉢形土器をはじめとする土器、石器、貝製品、金属片（青銅製品？）、貝類などが見つかりました。出土した金属片の分析の結果、銅や錫、亜鉛などの合金であることが分かりましたが、元々どのような製品だったかは不明です。

V層の白砂層（無遺物層）をはさんで、VI層直上からは埋葬遺構が発見されました。時代が判別可能な遺物が人骨や埋葬遺構内から伴わず、当初埋葬遺構の時期は不明でしたが、人骨を試料とした年代測定を行った結果、約2,500年前（縄文時代晚期に相当）の人骨であると判明しました。VI層直上の埋葬遺構は3基確認されました。埋葬遺構1からは2体分の人骨が検出されました。2体の人骨は頭骨が無い状態でしたが、その他の部位に関してはほとんど解剖学的位置が保っていたことから、一次葬の可能性が考えられました。また、2体の人骨は上下に接していたことから、埋葬時期に関してほとんど時期差がないと考えられます。2体の人骨は分析の結果、いずれも成人（20歳以上）の男性であることが判っています。埋葬遺構2は頭骨のみが見つかったお墓です。人骨の分析から成人（20歳以上）の男性の骨ということが分かり、埋葬遺構1から発見された1体から抜き取られた可能性が考えられます。頭骨の近くからサメ歯状貝製品が見つかっており、副葬品の可能性があります。埋葬遺構3は石棺墓で人骨1体が葬っていました。人骨は解剖学的位置を保っており、分析を行った結果、老年（60歳以上）の女性であることが分かりました。人骨の左手首にゴホウラ製の貝輪が着装した状態となっていました。県内では貝輪着装人骨の事例がまだ少なく、先史時代の葬法や習俗を考える上で貴重な発見といえます。

Data

目的 県営農地保全事業（浸透池設置工事）に伴う記録保存調査

所在地 伊江村字川平

調査面積 約567m²

調査期間 平成25（2013）年7月～11月

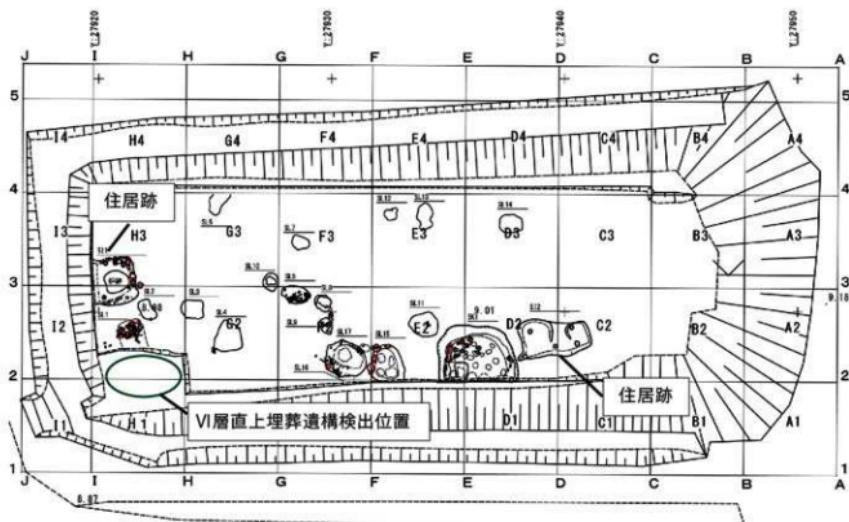
VI層からは縄文時代後期の遺構や遺物が発見されました。遺構は竪穴住居跡が2基、炉跡が17基、大型の焼成遺構が1基見つかり、遺物としては土器、石器、貝製品、骨牙製品、貝類、獸魚骨類など多種多用な遺物が見つかりました。土器は伊波式・荻堂式といった約3,500年前の土器が主体となっており、煮炊き用と考えられている深鉢形土器が多く出土しました。沖縄諸島の土器だけではなく、面繩東洞式、嘉徳II式など奄美諸島で多くみられる土器も発見されています。石器は、石斧、磨石、敲石、石皿、石錘などが見つかりました。貝製品は貝皿、貝錘などの実用品、貝輪、貝珠、獸型貝製品などの非実用品が見つかりました。特に数多く出土した貝製品には、チョウセンサザエ製貝器があります。チョウセンサザエ製品は腹縁部の一部を使ったもので約17,000点見つかっており、使用用途としてはスクレイパーのような用途を考えています。骨牙製品はかんざし、蝶形骨器などが見つかっています。自然遺物は、マガキガイ・チョウセンサザエ・シャコガイ類などの海産貝や陸産貝の他、シレナシジミといったマングローブに生息する貝も見つかりました。獸魚骨は、イノシシ・クジラ・カメ類などといった動物骨、ブダイ・フエフキダイなどの魚骨が見つかりました。

おわりに ナガラ原第三貝塚では、同じ場所における各時代での土地利用の変わり方を観ることができました。縄文時代後期には、竪穴住居跡や炉跡などが造られたことから、生活の場もしくはキャンプ地として利用されたことが考えられます。続く、縄文時代晚期には人を葬る場所として利用されました。その後白砂（V層）が堆積した後、貝塚時代後期には生活の場と同時に交易の場所として利用されたと考えられます。また、弥生時代並行期のイモガイ集積遺構や島外産のものと考えられる石材（チャートなど）や貝類（シレナシジミなど）が見つかったことから、先史時代の交流の様相をうかがい知ることができました。

ナガラ原第三貝塚は伊江村教育委員会・沖縄県教育委員会・伊江村農林水産課・沖縄県農林水産部と協議を行い、石棺墓などが発見された調査区の西側が現地保存されました。



ナガラ原第三貝塚 位置図【地理院地図(電子国土基本図)に加筆して掲載】



VI層（縄文時代後期層） 遺構配置状況



IV層（弥生並行期層）貝溜り



IV層（弥生並行期層）出土土器（浅鉢形）



VI層直上の埋葬遺構 1

写真右側が上半身となります。



VI層直上の埋葬遺構 2

写真上部に人骨。下部にサメ歯状貝製品。



VI層直上の埋葬遺構 3 左手首にゴホウラ製貝輪を着装。



VI層（縄文時代後期層）の竪穴住居跡



VI層（縄文時代後期層）の炉跡



VI層（縄文時代後期層）出土土器



VI層（縄文時代後期層）出土 チャート

チャートは伊江島島内でも見られますが、写真のチャートの塊は島外産と思われます。

浜崎貝塚

縄文時代～弥生から平安時代並行期

調査主体：伊江村教育委員会

はじめに 浜崎貝塚は伊江島の南東側の海岸砂丘、低台地上に立地している遺跡で、1978（昭和53）年と1980（昭和55）年に発掘調査が行われ、遺跡の一部は県の史跡に指定されています。2017（平成29）年、野球場整備工事に係る浸透池の設置工事に伴い埋蔵文化財緊急発掘調査を行いました。2018（平成30）年度からは出土資料の整理を行っています。

調査成果 発掘調査の結果、弥生から平安並行期（約1,500年前）と縄文時代後期～晩期（約3,000～2,500年前）の2時期が確認されました。本調査区の主体は、縄文時代後期となります。

弥生から平安時代並行期の層から見つかった遺物としては、土器、石器などが出土しています。

縄文時代後期～晩期の層からは、遺構として、竪穴住居跡、土坑、炉跡が発見されました。竪穴住居跡は地面を掘りその周囲に積石の壁の跡と思われる石列を配しているタイプが見つかっています。周囲に配置された石には伊江島でも見られる石灰岩の他、島では見られない石材も用いられていました。また、一部岩盤を削って造られた住居跡も見つかっています。

遺物は、土器、石器、貝製品、骨牙製品、獸魚骨類、貝類が発見されました。土器は大山式などの沖縄諸島で見られる土器、面繩西洞式など奄美諸島や沖縄諸島で見られる土器が発見されました。石器は石斧、磨石、凹石、石皿、石錘などの実用品、装飾品の可能性がある石製垂飾品と思われる製品が見つかっています。貝製品はホラガイ有孔製品、貝皿、刺突貝とされる尖頭器状製品などの実用品、貝輪などの非実用品が出土しています。骨牙製品は骨錐などの実用品、蝶形骨器といった非実用品が見つかりました。貝類はサラサバティ、シャコガイ類などの海産貝、陸産貝が多数見つかり、獸魚骨類ではブダイ、イノシシなどの骨が見つかっています。

おわりに 今回の調査では、住居址、炉跡、土坑など多数の遺構、土器・石器・貝製品・骨牙製品が見つかりました。過去の調査においては住居址などの遺構が見つかっていないことから、縄文時代層での遺跡の中心地は今回の調査地であった可能性があります。

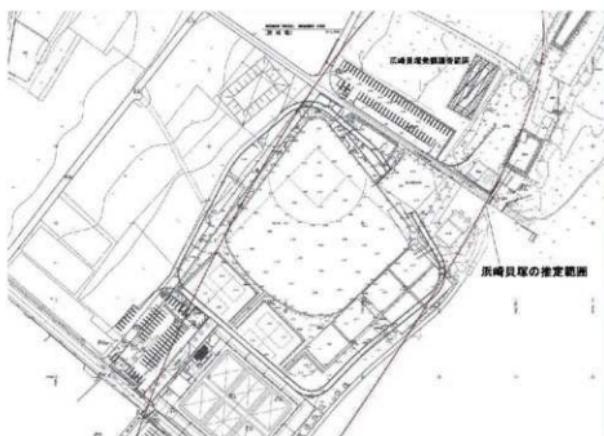
これまで、伊江島では弥生から平安時代並行期の遺跡が多く発掘されていましたが、ナガラ原第三貝塚や本遺跡の発掘調査で縄文時代の生活の様子が少しずつですが分かってきました。

Data 目的 伊江村総合運動公園野球場整備工事（浸透池設置工事）に伴う記録保存調査

所在地 伊江村字東江前 調査面積 540m² 調査期間 平成29（2017）年4月～10月



浜崎貝塚 調査地位置図【地理院地図（電子国土基本図）に加筆して掲載】



浜崎貝塚 調査箇所



土器 出土状況



石器（石斧）出土状況



貝製品（貝匙）出土状況



竪穴住居跡 挖削状況



竪穴住居跡 半裁状況



蝶形骨器 出土状況

浦底遺跡

200本以上の世界最多の貝斧出土遺跡

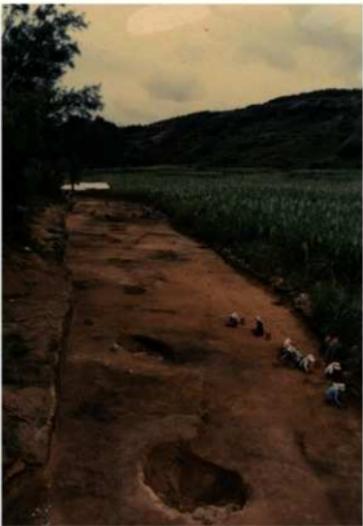
無土器期

調査主体：旧城辺町教育委員会

はじめに 浦底遺跡は、現在の浦底漁港の南東側に位置する砂丘に形成された遺跡です。昭和62（1987）年から昭和63（1988）年にかけて、城辺町教育委員会が沖縄県教育委員会の協力をえて発掘調査が実施され、2017年度より報告書作成のための再資料整理作業が行われています。

調査区は、大きく東地区と西地区からなり、発掘調査では、200本以上のシャコガイ製貝斧やその未成品のほか、スイジガイ製利器、ホラ貝有孔製品、イモガイ製品（シェルディスク他）、サメ歯有孔製品、イノシシ犬歯有孔製品などバリエーション豊富な貝、骨製品が出土しています。また、集石遺構が160基以上確認されています。

年代測定の結果から約2,500年前から1,800年前の遺跡とされます。



発掘調査作業風景（西地区・西側より撮影）



浦底遺跡・アラフ遺跡と周辺遺跡位置図

Data 目的 記録保存調査

所在地 宮古島市城辺字福里

調査期間 昭和62（1987）年～昭和63（1988）年

貝製品



シャコガイ製の貝斧と貝斧未成品

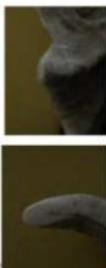
シャコガイを素材とした斧やその未成品が200点以上出土しています。



スイジガイ製利器と刃部の拡大写真

スイジガイの突起部を磨き、刃部を形成します。

※ →の部分が刃部をもった突起部分



イモガイ



① シェルディスク
(イモガイ製)

② イモガイ有孔製品

シェルディスクは①、
有孔製品は②の部分を
使用しています。



ホラ具有孔製品



貝製小玉
(マガキガイの螺頭部を利用)

動物骨製品



サメ歯有孔製品
(イタチザメの歯)



イノシシ犬歯有孔製品



クジラ骨を加工した製品

石器



石斧（緑色片岩製）



有孔石製品



砥石（貝斧を磨くための
道具と考えられる）

調査の方法 発掘調査は、道路の建設工事にそって調査区を設定しています。調査区は、 $4 \times 4\text{m}$ のグリッドで区画され、大きく東地区と西地区という2つの調査区に分かれます。発掘調査は、両地区ともに1層の耕作土を重機で掘削し、2層より人力で発掘作業をすすめています。



調査の成果 東地区の堆積層は、全体で第1層から6層に分層され、2層から5層にかけて無土器期の遺物が出土し、集石遺構も各層から検出されています。

西地区は、第1層から第5層に分層され、第4層がa、b、cの3つ細分されています。西地区でも第2層から第4層にかけて無土器期の遺物が出土するとともに、各層から集石遺構が検出されています。



第99号～107号 集石遺構検出状況（西地区・第3層）
石灰岩を中心とした礫が一定の範囲にまとまって検出され、火をうけた痕跡が確認できます。

遺物出土状況 ※出土した層は同一ではありません。



石皿



石斧



サメ歯有孔製品

アラフ遺跡

宮古島市内の無土器最古の遺跡。祭祀儀礼の痕跡か？

無土器期

調査主体：アラフ遺跡発掘調査団

はじめに アラフ遺跡は、城辺新城海岸に位置する約2,800～1,800年前の無土器期の遺跡です。2000～2006年にかけて、沖縄国際大学の江上幹幸教授を団長とするアラフ遺跡発掘調査団によって8次にわたる発掘調査が実施されています。これらの調査成果については、2003年と2018に報告書が刊行されており、発掘調査で出土した資料については2015年に宮古島市教育委員会へ移管されました。今回は、2018年に刊行された報告書の成果を広くご紹介することを目的として本速報展での展示となりました。

アラフ遺跡の立地と環境

無土器期の多くの遺跡は、砂丘地に立地します。現在の砂浜よりも内陸側にある保安林の一帯に遺跡が形成されています。砂丘地の後背には標高80m以上の丘陵があり、琉球石灰岩と島尻層の不整合面からは湧水が豊富に流れ出ています。また、砂丘の前面には礁嶺を有した穏やかな海域（イノー）が広がっています。



遺跡遠景



琉球石灰岩と島尻層の不整合面から流れ出る湧水

Data

目的 確認調査

所在地 宮古島市城辺字新城

調査期間 平成12（2000）年～平成18（2006）年



◀ ▲ シャコガイ製貝斧と出土状況
シャコガイを利用した斧。



▲ ▶ 貝斧埋納遺構 4点の貝斧をセットにして埋めています。



サメ歯有孔製品と出土状況



スイジガイ製利器



クモガイ製利器



マガキガイ製の小玉

発掘調査の成果 アラフ遺跡の発掘調査は、全体で 10 の試掘坑を設け、遺跡の広がりについて調査を行っています。また、調査区 1・2 については調査区を拡張し、より詳細な遺跡の性格について調査を行っています。

この調査区 1・2 の発掘調査では、宮古島の無土器期最古となる約 2,800 年前の生活層が確認されています。そして、アラフ遺跡においては、非常に長期間にわたって人々が生活していたこともわかってきてています。他の無土器期の遺跡と同様に、集石遺構が検出され、シャコガイ製の斧（貝斧）を中心に、スイジガイ製利器や、サメ歯有孔製品など多様な道具が出土しています。特筆すべきは、「貝斧埋納遺構」と称されるように、4 本の貝斧と 1 本の枝サンゴが植物性の籠に入れられたように出土したことがあります。これは、何らかの祭祀儀礼の一つとして埋納されたと考えられ、世界的にも例をみない発見となりました。



発掘作業風景



▲ 集石遺構 拳大の琉球石灰岩やサンゴ石灰岩が一定の範囲にまとめられ、熱をうけて黒く変色している。アースオーブンなどの調理遺構の跡と考えられています。



貝集積 チョウセンザザエやサラサバティなどの当時の食料と考えられる貝が多量に出土しています。

へしきや 平敷屋トウバル遺跡

縄文時代、貝塚時代後期、グスク時代

調査主体：うるま市教育委員会

遺跡の位置 本遺跡は、太平洋に向けて突き出た勝連半島にある沖縄県うるま市勝連平敷屋に位置し、在沖米海軍施設ホワイトビーチ内に所在します。勝連半島は、北側は金武湾、南側は中城湾に面し、沿岸には沖積層の低地が細長く伸び、その背後には琉球石灰岩の丘陵が走り台地を形成しています。本遺跡が所在する在沖米海軍施設ホワイトビーチは勝連半島の最東端にあり、本遺跡は中城湾に面した低砂丘地に立地しています。遺跡の背後には丘陵がそびえ立ち、丘陵からは沢や湧水も確認されており、水源に恵まれた土地です。



平敷屋トウバル遺跡の位置

Data

所在地 沖縄県うるま市字平敷屋 目的 開発に伴う緊急発掘調査及び立会調査

調査期間 平成 22（2010）年 9月～平成 22（2010）年 10月、

平成 28（2016）年 2月

調査成果 これまでの調査では、縄文時代後期（貝塚時代前期）の土坑や堅穴住居跡、貝塚時代後期（弥生～平安時代並行期）のゴホウラガイやイモガイの貝集積遺構、グスク時代の建物跡と考えられるピット群が確認されています。これまでの数度に渡る調査成果から半島の内陸側に縄文時代の遺構や遺物包含層があり、海岸に向けて貝塚時代後期の遺構や遺物包含層が広がっていることがわかっています。

遺物については、縄文時代からグスク時代にかけての土器や石器等が出土しており、その出土量は豊富です。土器については、縄文時代中期頃の条痕文土器も出土しており、およそ4000年前から人が生活していたと考えられます。

また、貝製品や骨製品も多く、貝製品は貝刃、有孔製品、貝輪、サメ歯模造品、獸形貝製品等が出土し、骨製品は骨錐、骨針、有孔製品、簪の一部等が出土し、実用品から装飾品まで幅広く出土しています。

出土遺物の中でも砂岩に文様を彫り込んだ線刻石板は貴重な資料です。砂岩に彫り込まれた文様は、線画を主体としており、この線画には直線とステップ状の線があり、両者を組み合わせた構図が彫り込まれています。また線画以外には、線画間の空間に点画も彫り込まれています。これらの線画や点画は、琉球列島の縄文時代後期（貝塚時代前期）に分布した嘉徳式土器や伊波式土器、荻堂式土器の文様要素と考えられ、本遺跡からは伊波式土器が多く出土しています。また、線刻石板の形状は、上端部は山形を呈しており、縄文時代後期（貝塚時代前期）の土器の山形口縁を模していると考えられます。このような土器の形状を模し、土器の文様を彫り込む石製品は、これまで全国的に見ても発見例がなく、琉球列島の先史時代における精神的世界觀を紐解く貴重な資料として位置づけられます。



ゴホウラガイの集積遺構



伊波式土器の出土状況



線刻石板（文様部分）

勝連城跡

貝塚時代後期、グスク時代

調査主体：うるま市教育委員会

はじめに

勝連城跡は、勝連半島の南風原にある琉球石灰岩丘陵上（標高約 98m）に築かれたグスクで、城内は 5 つの曲輪からなり、北西の最高部に一の曲輪、東側へ二の曲輪、三の曲輪、四の曲輪と階段状に低くなっています。そして四の曲輪の南東側で再び高くなり、東の曲輪があります。丘陵と一部の谷間をうまく利用した姿は巨大な進貢船にも例えられています。一番高い一の曲輪に上ると、北は金武湾とそれを囲む北部の山々や太平洋側の島々が見え、南は知念半島や中城湾、中城湾の対岸には護佐丸の居城であった中城城跡が一望できる景勝地となっています。



勝連城跡の位置

Data

所在地 沖縄県うるま市勝連南風原

目的 史跡整備のための遺構調査

調査期間 平成 28 (2016) 年 9 月～平成 29 (2017) 年 1 月

平成 29 (2017) 年 8 月～平成 30 (2018) 年 1 月

調査面積 【平成 28 年度】約 300m² 【平成 29 年度】約 300m²

遺構調査 勝連城跡の遺構調査は、昭和39年に一の曲輪からはじまり、現在は東の曲輪まで調査が及んでいます。

平成28年度と平成29年度に実施した東の曲輪の遺構調査では、外壁の石積やそれに関わる遺構、建物の柱痕が確認されました。

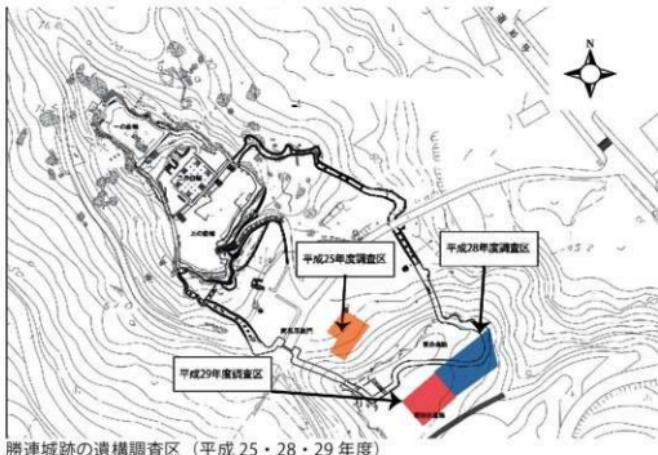
発掘調査は、バックホーにより表土の掘削を開始すると、地表面では確認できていなかった石積が見え始め、全体的に掘り下げが完了すると、これらの石積は石積内側の最下段の根石であることが判明しました。残念ながら外壁の石積は失われていて、確認することができませんでした。

根石の下部は、石灰岩の小礫が充填されており、幾つかは根石が小礫に埋没していました。また、石積に直交するようにサブトレーナーを設定し、下部構造を確認したところ、東側の谷に向かい土と石灰岩の小礫が混じる層や石灰岩を充填した礫層があり、縁辺部には土留めと思われる大形の石灰岩が配置されていました。このような構造は、台地縁辺部に築かれた東の曲輪の立地から、東の曲輪内の地盤をより強力に且つ地盤の安定性を保つための土木技術と考えられます。東の曲輪においては、その立地と東側の防衛の要という性格上、地盤の安定性は重要であったと考えられます。

また東の曲輪南側では、ピット遺構を多数検出し、その中には建物の柱穴と考えられる遺構がありました。現在、ピット遺構について整理しているところですが、長方形の建物プランが数棟確認できています。

遺物は、土器、カムィヤキ、白磁、青磁、石器、金属製品、貝殻や獸骨であり、土器や陶磁器に関しては大半が小破片でした。遺物の種類については、これまでの調査と変わりませんが、土器の量が圧倒的に多いことと、これに対して青磁の出土量が西側の一～四の曲輪よりも少ない印象を受けます。土器はくびれ平底土器の底部やグスク土器などが確認されています。

当遺跡において、このように貝塚時代後期の土器が東の曲輪を含む広範囲で出土する状況は、貝塚時代後期からグスク時代への過渡期にあたる勝連グスクの成立期を考える上で良好な資料といえます。



勝連城跡の遺構調査区（平成25・28・29年度）



東の曲輪石積検出状況



東の曲輪柱穴検出状況

西洋貨幣について 平成 25 年度に実施した四の曲輪の遺構調査で、遺構調査区内から 9 点、城外から 1 点、合計 10 点の丸く小さな金属製品を発見しました。資料を持ち帰り整理を進めていたところ、それらがローマ帝国期とオスマン帝国期の貨幣であることが専門家による分析で確認されました。資料は銅が主成分であり、10 点のうち 5 点はある程度推測ができるおり、4 点は 3 ~ 4 世紀頃のローマ帝国の貨幣、1 点は 17 世紀に製造されたオスマン帝国の貨幣であることが確認できています。

ここではこの資料に関連して 17 世紀頃の勝連グスクについて少し触れたいと思います。勝連グスクは 1458 年に首里王府により攻められ廃城となりました。廃城になった後の歴史について具体的に示されている史料は確認されていません。しかし、16 ~ 17 世紀にかけて首里王府によって編纂された琉球最古の歌謡集『おもろさうし』には最後の城主であった阿麻和利や勝連地域の繁栄を謡った詩が数多く残されていることから、廃城後もグスクとしての認識は途絶えず存在していたことがわかります。18 世紀代では、1713 年に王府によって編纂された地誌である『琉球国由来記』に、勝連グスク内の拝所である玉ノミウチ御嶽等が記載されています。1726 年にはグスクの南側の城下に隣接していた南風原集落がグスクの北西側（現在地）に移動し、勝連グスク一帯は耕作地として利用された歴史が残っています。勝連グスクの最も古い明治期の写真には、城外北側の斜面地が耕作地として利用されている様子が写っています。また、沖縄県指定有形文化財として残っている『南風原村文書』の中には明治 35 年（1902 年）に作成された地籍図があり、グスクの一の曲輪から三の曲輪にあたる場所に「拝所」と書かれ、周辺は耕作地であることが書かれています。

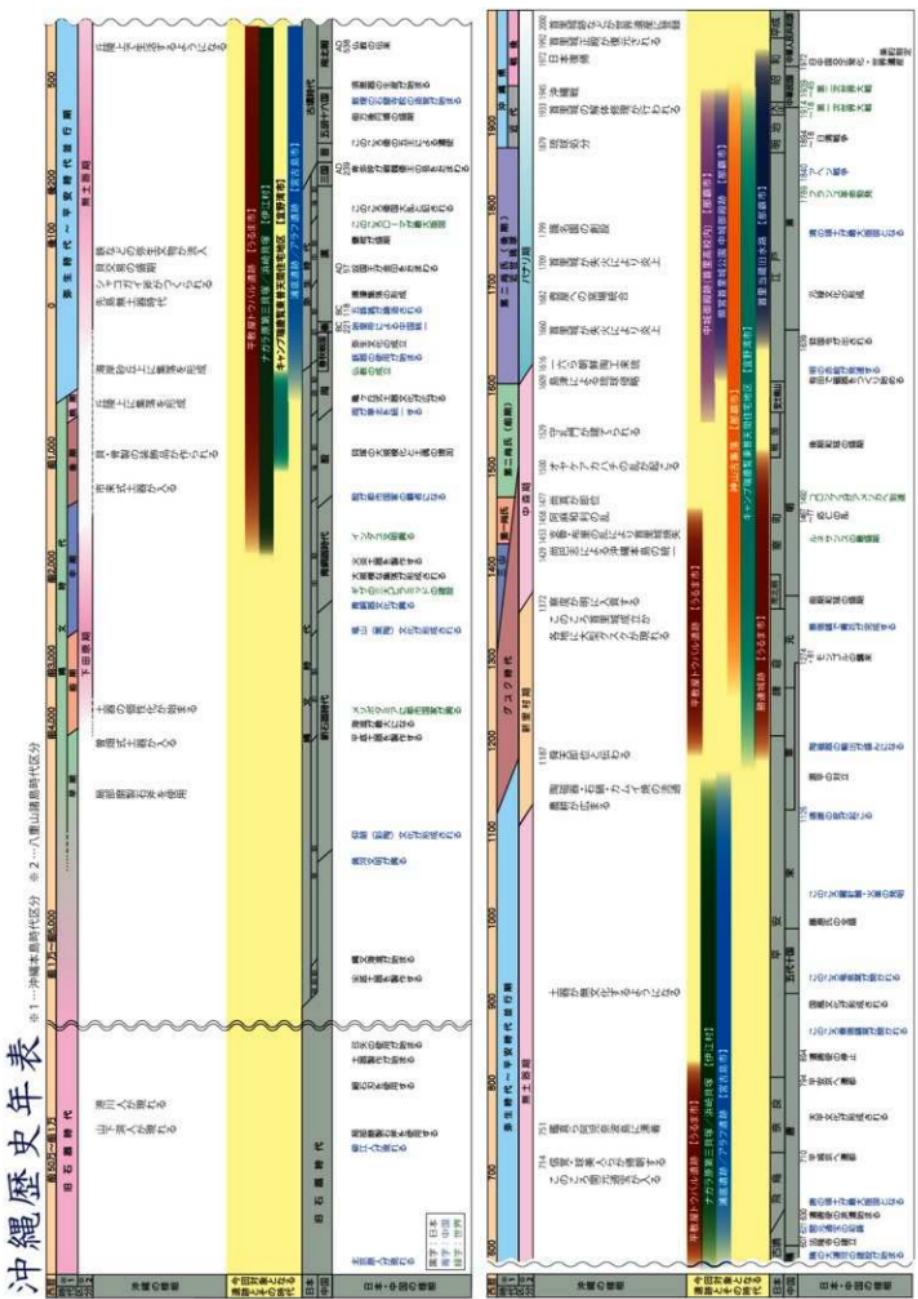
以上のように廃城後の勝連グスクは、徐々に拝所としての認識が強くなっていき、その周辺は耕作地へと変わっていきました。出土したオスマン帝国期の貨幣の年代は、廃城後の時期にあたり、直接海外交易よりもたらされたとするには、同時期の勝連グスクの様相を明らかにすることと他の遺物の再検討が必要です。また、拝所に係わる祭祀の道具の一つとも想像できますが、結論に至るには資料不足です。今後もまだ未同定の資料を含め、さらなる追求をしていきます。



平成 25 年度の調査で出土した西洋貨幣

4 : オスマン帝国貨幣 その他：ローマ帝国貨幣（推定）

沖縄歴史年表



発掘調査のきっかけ（契機）とは

一概に発掘調査といっても、そのきっかけ（契機）や原因がいくつかあります。そもそも、遺跡などの発掘調査は考古学的な手法を用いておこなうわけですが、それによって過去の人たちの生活や行動を復元し、当時の歴史や文化を明らかにしていくことを目的にしています。

発掘調査は、大きく「学術調査」と「行政調査」のふたつに分けることができます。「学術調査」とは、大学の考古学研究室などの研究機関がおこなう発掘調査で、学術的な目的意識（研究テーマ）を持って取り組まれます。

一方、「行政調査」とは、行政機関（教育委員会など）がおこなう発掘調査で、その契機や原因によって大きく3つに分けることができます。

まず、遺跡（埋蔵文化財）の適切な保護を目的とし、その所在・内容等を把握するための調査があります。

次に、保存・活用のための発掘調査があります。重要な遺跡の評価をおこなうための調査や、史跡指定された遺跡の整備・活用のために行われる調査も含まれます。

最後に、記録保存のための調査があります。この調査は、開発側との調整によって、現地保存ができなくなる遺跡について、開発に先立ち発掘調査をおこなうものです。この調査によって得られた記録類は、消滅した遺跡に代わって、遺跡の内容を後世に伝えるものとなります。

このように、発掘調査にも様々なケースがありますが、いずれの場合も遺跡にメスを入れることには変わりがありません。発掘調査がおこなわれた遺跡は二度と元に戻らないですから、より慎重な発掘調査をおこなう必要があります。

現在、県内では当センターや市町村教育委員会、大学の考古学研究室などが実施している発掘調査が毎年数十件ありますので、機会があれば発掘調査現場に足を運んでみてください。

県内の発掘調査情報に関しては発掘調査を実施している市町村教育委員会、若しくは以下にお問い合わせください

- 沖縄県教育庁文化財課 記念物班 埋蔵文化財担当 TEL 098-866-2731
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班 TEL 098-835-8752

発掘調査速報 2018 関連文化講座

会場：当センター研修室 定員：各 140 名

予約不要・参加無料

2018年8月4日（土）13:30～（13時開場）

第72回文化講座

- 勝連城跡・平敷屋トウバブル遺跡〔うるま市〕
- 中城御殿跡〔首里高校内〕〔那覇市〕
- 県営首里城公園 中城御殿跡〔那覇市〕
- 首里当蔵旧水路〔那覇市〕

2018年8月12日（日）13:30～（13時開場）

第73回文化講座

- キャンプ瑞慶覧東普天間住宅地区〔宜野湾市〕
- 神山古集落〔宜野湾市〕
- 浦底遺跡・アラフ遺跡〔宮古島市〕
- ナガラ原第三貝塚・浜崎貝塚〔伊江村〕

沖縄県立埋蔵文化財センター

発掘調査速報 2018

発行日：平成30（2018）年7月31日

編集・発行：沖縄県立埋蔵文化財センター（調査班）

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8752 FAX 098-835-8754

H P <http://www.pref.okinawa.jp/edu>